

子宮内の水胞について

浦河診療所 大塚智啓

浦河診療所の大塚と申します。今回は、繁殖シーズン中に皆さんも耳にすることがあると思われる子宮内の水胞（シスト）についてお話をさせていただきます。

子宮内水胞は高齢の繁殖牝馬で見られ、リンパ液が中に含まれています。水胞が存在することは、子宮内膜で線維化を伴う加齢性変化（老化現象）が起きていることを示唆しています。線維化が起こると子宮の機能が低下し繁殖成績が低下すると考えられています。水胞自体の繁殖成績への影響は、数・大きさ・位置によります。小さかったり少なければ影響はないですが、大きかったり多ければ不受胎の原因となったり妊娠の維持に悪影響を及ぼすことがあります。

水胞が及ぼす影響

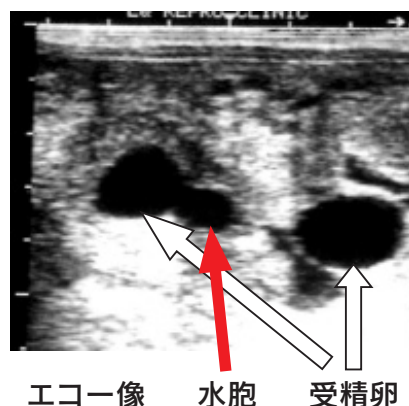
受精卵は、排卵後約5～16日目まで子宮内を移動しながら発育し、17日目に子宮角の基部に固着します。しかし、水胞が大きかったり、数が多ければ、受精卵の移動を妨害したり、着床の妨げとなるため早期胚死滅の原因となることがあります。過去の報告で、最初の妊娠鑑定時に水胞が認められた繁殖牝馬の早期胚死滅の発生率は16.0%であるのに対して、認められなかった馬の発生率は5.1%であったので、水胞がある繁殖牝馬の方が早期胚死滅が起こりやすいという報告があります。しかし、水胞が全ての早期胚死滅の直接の原因ではなく、前述の通り水胞がある→子宮内膜の線維化が起きている→子宮の機能が低下しているということなので、

この事象も早期胚死滅に関与しているものと考えられます。また、受胎したとしても大きな水胞が存在すると、その部分で胎盤が子宮を通じて栄養を受け取れずに胎児の成長に影響が出る可能性があるとも言われています。したがって、水胞の数が多かったり、大きかったりした場合には、その水胞を焼烙したり潰したりする等の処置が必要となります。小さな水胞の場合でも、形によっては初回妊娠鑑定時に受精卵との判別が困難になることがあります。

診断・処置

診断はエコー検査や子宮内視鏡検査により行われます。検査により水胞の数、大きさ、位置が分かるので、それを基に処置するかを決定します。処置しない場合でも記録することにより妊娠鑑定の時に、水胞と受精卵の判別が容易になります。

水胞の処置は、内視鏡で子宮内を見ながら電気メスやレーザーで焼烙したり、子宮外口が開いている時期には陰部から手を入れて潰す方法があります。



水胞は1回できてしまうと、処置しても再発してしまうこともありますので、長い付き合いになってしまうことが多いです。

以上で終わります。ありがとうございました。